

「ぶん殴って正気に戻してやる」 ——「ジャネットの改悛」におけるアルコール依存と家庭暴力

谷田 恵司

序

「ジャネットの改悛」『Janet's Repentance』はジョージ・エリオット George Eliot の小説家としての出発点となった中編連作三部作『牧師館物語』*Scenes of Clerical Life* (1858) の3番目の作品である。この作品については、かつては単なる習作的作品に過ぎないとされていた時期もあったが、近年では、宗教（特に福音主義）と人間性の問題、個人と共同体の関係、女性の自立、男女や夫婦の関係の変化などの様々な観点からの検討がなされてきている。片岡信がこの作品を「その後の作品群で扱われることになるテーマの多くを含んだ、エリオットの原点ともいえる作品ではないだろうか」¹⁾と評価しているように、ここに後のエリオットの作品に現れるテーマの原型が見られる点が、この作品の特徴の第一点としてあげられるであろう。さらに、この第三作では、エリオットがジャネット Janet というヒロインにおいて、前二作の女性登場人物たちと比較して圧倒的により複雑で立体的な女性像を作り出していることも注目に値する²⁾。

また、エリオットの後の作品では本格的に扱われることのない問題もこの作品には見られる、という点が第三の特徴としてあげられよう。アルコール依存と家庭内暴力³⁾である。中島正太は本作品を「DV (Domestic Violence, 家庭内暴力) やアルコール中毒といった、現代の社会にも依然として存在する問題と関連づけて読めるという点でも貴重な作品である」⁴⁾とみなしている。またスピルカ Spilka は、本作品を「家庭内暴力をきわめて深刻な社会問題として初めて取り扱った近代的作品」⁵⁾であるとしている。アルコールと人間との関係は、この作家の後の作品で全く扱われないわけではなく、たとえば『ミドルマーチ』

Middlemarch のラッフルズ Raffles のようないわゆる「アル中」⁶⁾の脇役的人物は存在する。だが、主要な人物に関わる問題点として本格的にアルコール依存が扱われることはない。また深刻な家庭内暴力はこの作品以降には見られない。

アルコール依存と家庭内暴力とは、肉体と精神のアンバランスや人間関係の歪みが依存や暴力という形で顕在化する現象である。本論は「ジャネットの改悛」をこの二つの視点から検討した場合に何が見えてくるかを考え、そこからエリオットの想像力の特徴の一端を探ろうとする試みである。

1

弁護士デンプスター Dempster は作品の冒頭で初めて登場する時に、すでに酒を飲んだ状態である。そして、以下の二つの引用で示されるように、彼はアルコールに強い人物として仲間の男たちの賞賛の的となっている。

‘I never see Dempster’s equal; if I did I’ll be shot,’ said Mr Tomlinson, looking after the lawyer admiringly. ‘Why, he’s drunk the best part of a bottle o’ brandy since here we’ve been sitting, and I’ll bet a guinea, when he’s got to Trower’s his head’ll be as clear as mine. He knows more about law when he’s drunk than all the rest on ‘em when they’re sober.’⁷⁾

‘He’s a long-headed feller, Dempster; why, it shows yer what a headpiece Dempster has, as he can drink a bottle o’ brandy at a sittin’, an’ yit see further through a stone wall when he’s done, than other folks’ll see through a glass winder.’ (257)

家庭外ではこうして賞賛の対象とまでなっている彼の飲酒は、家庭内においては逆に妻ジャネットに対する暴力を引き起こす要因として機能している。飲酒と暴力のあげく、彼は妻を家から追い出してしまう。彼は妻をパートナーというよりも家庭内奴隷として扱い、配偶者であるよりも支配者として君臨して

いたが、そうした男にとって妻を追い出すことはすなわち、被支配者を失った支配者、家来のいない王となることである。妻という名の奴隷を家の外に追いやることで、独裁者としての権力を誇示するというより、かえって自らその支配権を放棄してしまうのである。そして、支配を逃れたジャネットにとって、それは自立への第一歩となる。デンプスターの飲酒癖と暴力が、結果的にジャネットの独立を促すのだ。

そもそも、彼がジャネットを追い出した直接のきっかけは、妻が用意した服を気に入らずに投げ出し、また妻はそれを夫が放置したままにしておいて、夫に客人の前で恥をかかせたことである。召使にやらせずに妻が自ら夫の服を用意することは、単に家庭内の雑用としての行為である以上に、妻の夫への愛情表現の形態でもあり、かつまた服自体は夫の権威の象徴でもある。ここでは夫は妻から愛情を受け取らず、また妻は夫の権威を放置する。こうしてこのシーンからは、双方の愛情と、さらには支配と被支配の関係が、ともに消えかけていることが読み取れる。実際に夫が妻を追い出すという行動が起こる前に、すでに愛情も権威も失われているのである。

また、こうしたデンプスターの支配力の衰退は家庭内だけに留まらず、ミルビー Milby の町全体に対する彼の影響力の衰退と呼応している。作品冒頭では、彼は取り巻きにちやほやされ得意の絶頂であった。しかしやがて、彼が中心となって始めた、トライアン Tryan に対する攻撃は失敗し、更に仕事上も顧客を失い始め、‘Dempster’s luck is forsaking him.’ (333) と言われるまでになる。

自ら支配権を放棄する行為を、デンプスターはほかの場面でも見せている。彼が瀕死の重症を負うことになる二輪馬車の事故の原因は、彼の無謀な運転に加えて、使用人のドーズ Dawes が彼のもとを去ってしまったことである。彼はドーズが遅れてきたのに腹を立てて鞭打ち、御者を失ったのだ。そこで自分で馬車を走らせ、それが事故につながった。彼は自己の行動への制御を失ったのだ。事故の後でジャネットに看病されながら、彼は妄想にうなされる。

‘Let me go, let me go,’ he said in a loud, hoarse whisper; ‘she’s coming ... she’s cold ... she’s dead ... she’ll strangle me with her black hair. Ah!’ he shrieked aloud, ‘her hair is all serpents ... they’re black serpents ... they hiss ... they hiss ... let me go ... let

me go ... she wants to drag me with her cold arms ... her arms are serpents ... they are great white serpents ... they'll twine round me ... she wants to drag me into the cold water ... her bosom is cold ... it is black ... it is all serpents ...' (381)

これは直接的には馬車の事故による怪我がきっかけとなった妄想であるが、実はこの場面はアルコール依存者に特有の典型的症状を描いたものである。この症状は、筋肉の無意識的運動に錯覚や幻覚などの意識障害が伴う「震顫譫妄症^{しんせんせんもう}」の状態である。エリオットは極めて迫真的にかつ正確にこの症状を描写している。この場面の科学的正確さについては、アメリカ精神医学会編の『精神障害の診断と統計の手引き 第三版』よりも、エリオットのこの作品の方から我々は「震顫譫妄症についてより多くを学ぶ」⁸⁾という意見も見られるほどである。

ここで少し伝記的なわき道にそれる。この作品におけるデンプスターやジャネットそしてトライアン牧師にモデルがいたことは知られている⁹⁾。そして、エリオットのこうした迫真的な描写は、実際にアルコール依存者を身近に知っていたから可能だったのだろう、と考える研究者もいる。

ショー Shaw はエリオットが身近に知っていた可能性のある女性アルコール依存者として、ナンシー・ブキャナン Nancy Buchanan とマライア・ルイス Maria Lewis の二人の名をあげている¹⁰⁾。ちなみにナンシー・ブキャナンは、エリオットがデンプスターのモデルとした男の妻であり、マライア・ルイスは幼年時代にエリオットが通った学校の教師である。

これに対して、マコーマック McCormack は、*George Eliot and Intoxication* 中の「伝記的推測」と題した章で、ナンシー・ブキャナンに関してはアルコールとの関連を受け入れるが、マライア・ルイスをそうだったとする証拠はない、とする。そしてマコーマックは、それよりもっと身近なところで、エリオット自身の母クリスティーナ Christiana がアルコール依存であったのではと推測する。その根拠は、彼女が病弱だったこと、その死に際しての夫（つまりエリオットの父）と娘（つまりエリオット）の反応、そして何より、エリオットが母について沈黙していることである。マコーマックは次のように言う。

日記、日誌や手紙において40年以上にわたって、母親のことにほとんど全く触れていないという態度は、アルコール依存症の親を持つ子供の通常の反応であると言える。沈黙はそれ自体では何の証明でもないが、それは親の嗜癖を否定しようとする年若い子供たちの典型的な態度である。¹¹⁾

これは作家誕生の裏話としては確かに興味深い推論ではあるが（マコーマック自身が「推測」と題しているように）あまりに状況証拠に頼りすぎた、単なる推測の域を越えない説であろう。そしてそれはまた、エリオットの作家としての想像力を、単に現実の観察に基づく描写にすぎないと見なし、彼女の創造性を十分評価しない見方であるとさえ思える。

さて、上記のデンプスター錯乱の場面に戻る。たとえ妄想の中とは言え、それまで暴君として家庭内に君臨していた人間が、妻や使用人という奴隷を失い、逆に生命を脅かされる側に立つことになる。酒を飲むことが男らしいことだという暗黙の了解が崩壊し、過度の飲酒のもたらす妄想が男性の優位を揺るがすことになる。いわゆる「男らしさ」とされる大胆さ、自信、力強さといった要素を生み出していたはずのアルコールが、そうした価値観と正反対の、猜疑、不安、恐怖などの、いわば人間存在の根底にある弱さを引き出している。これが、この作品におけるアルコール依存の人間像の意味するところの一つであると思われる。

だが、そもそも彼の過度の飲酒と家庭内暴力はどのように発生したのか。作品中では次のように説明されている。

Cruelty, like every other vice, requires no motive outside itself — it only requires opportunity. You do not suppose Dempster had any motive for drinking beyond the craving for drink; the presence of brandy was the only necessary condition. (334-335)

And an unloving, tyrannous, brutal man needs no motive to prompt his cruelty; he needs only the perpetual presence of a woman he can call his own. (335)

オールドフィールド Oldfield が以下に述べているように、これらは納得のいく説明ではない。「デンプスターは『牧師館』における唯一の邪悪な人物であるが、その邪悪さの起源を解き明かそうとする試みが全くなされていない」¹²⁾ そのため、デンプスターの人間性はその暴力と自己中心性でのみ表現され、そうした状態に至る経緯が明らかでないため、単純かつ一面的である。ジャネットという人物が、自らのアイデンティティを一度は失ったのちに、自立への道を歩みはじめる女性像として広がりを持って描かれているのと比較して、デンプスターの側ではそれに対応する変化が見られないままで死んでいく。こうした点はやはり、まだ作家にとっては第3作目であるという経験の不足が主要因であろうか。

また、デンプスターの妻への暴力に関して、家庭内暴力も嗜癖（つまり習慣的、依存的）行動障害のひとつであるとして、アルコール依存との類似性を持つという次のような考えを紹介しておきたい。「その他の問題行動の中で、筆者自身が嗜癖行動障害に位置づけた方がよいと考える障害は、……近親者への虐待など、反復される自他への破壊的・暴力的行動である」¹³⁾。家庭内暴力はアルコールのような物質への依存でなく、いわば行動への依存である。デンプスターは第一にアルコールという物質に対して、次に妻への暴力という行動に対して、習慣的に依存するという障害を持つと言える。ジャネットも、アルコールに対する依存という点では夫と同様であるが、それには、夫の暴力行為からの逃避による依存という、十分な理由が示されている。もしエリオットがデンプスターの家庭内暴力をも（ジャネットのアルコール依存状態と同様に）暴力を向けられる相手（つまりこの場合は妻ジャネット）との関係性の問題として描いていたとしたら、この夫婦の姿をより一層複雑かつ立体的に描くことが出来たのではないだろうか。

2

次にジャネットを検討してみたい。まず注目したいのは、このヒロインが（冒頭での夫デンプスターの登場と同様に）作品中で初登場する際に酒気を帯びて

いる点である。彼女は、ほかの登場人物による噂話にはすでにその名が出ていたが、実際に読者の前に姿を見せるのは以下に引用する場面が最初である。

Her wide open black eyes had a strangely fixed, sightless gaze, as she paused at the turning, and stood silent before her husband.

'I'll teach you to keep me waiting in the dark, you pale staring fool!' he said, advancing with his slow drunken step. 'What, you've been drinking again, have you? I'll beat you into your senses.' (284-285)

弁護士の妻という社会的地位があり、教育を受けた女性が、家でこっそり酒を飲んでいたという、きわめて劇的な姿で登場する。『ダニエル・デロンダ』*Daniel Deronda* の冒頭でグエンドリン Gwendolen がルーレットをしている場面同様に、いわゆる伝統的な女性像（たとえば、前二作のバートン夫人 Mrs Barton やカテリーナ Caterina）からは大きく逸脱した姿でヒロインが登場するのだ。それはまた、アルコールの酩酊による、覚醒からの逸脱であり現実逃避である。しかし、その逃避が更にまた逸脱を加速するという悪循環こそが、こうした障害の特性である。ケッセル Kessel とウォールトン Walton はアルコール依存者についてこう述べている。

酒の力を借りて彼らは問題に対処し、家庭に向かい、自分自身を見つめる。アルコール中毒者は社会的存在として何とかうまく機能していくためにアルコールに依存するのである。社会人として有能にやっていくために頼るアルコールそのものが、残酷にもその社会的適応力をだめにするように働く——ここにアルコール中毒症の問題の皮肉さがある¹⁴⁾。

ジャネットの場合は、アルコールによる酩酊に逃避することで、苦しみを一時的に逃れることができるが、そうした手段による逃避はまた逆に罪悪感と自己嫌悪を招き、夫からの更なる暴力の原因ともなる。彼女は伝統的な女性像や覚醒状態から逸脱しているだけではない。妻としての立場からの逸脱もこの作品の大きなポイントである。デンプスターの服に関するエピソードの分析で述べ

ように、ジャネットは服を放置したことで夫の権威を失墜させ、その結果家を追われた。妻としてあるためには、夫が必要である。その夫の権威を認めないということは、同時に自らの妻としての存在をも失うことである。夜中に寝巻き姿のままで外へ出されたジャネットは、服だけでなく、妻としてのアイデンティティも、戻るべき居場所をも失ったまさに裸の状態である。だが同時に彼女は家庭内奴隷としての被支配の状態からも逃れたのだ。

ここで、この物語でのジャネットの生きてきた道筋をたどってみると、彼女は、結婚前には教育を受けた、誇り高い娘だったと言われる。それが弁護士の子となり、夫との不和が進んで家庭内奴隷のごとくに扱われ、それが元でアルコール依存者となる。そして、上記のような反抗的行動がきっかけとなって家を出され、かろうじて近隣のペティファ夫人 Mrs Pettifer の家に世話になることになったときには、娘でもなく妻でもなく、子供がいないゆえに母でもなく、ただ一人の女としての存在に還元される。そこから彼女は様々な姿を見せてゆく。看護（介護）者として、怪我をした夫、病気の娘サリー・マーチン Sally Martin そして病弱のトライアン牧師を看護し、また夫の妄想の中ではメデューサとなって彼をおびやかす、さらには未亡人となった後ではトライアン牧師のプラトニックな恋人的存在となる。そしてこの物語は、数十年後に彼女が孫（養女の生んだ息子）をつれて歩いている姿で物語が終わる。その姿を語り手は次のように描写する。'Janet Dempster, rescued from self-despair, strengthened with divine hopes, and now looking back on years of purity and helpful labour.' (412) このヒロインはアルコール依存者として登場し、聖女的な母として退場する。逸脱した女性像が正統的・伝統的な女性像へと変化してゆく姿は、エリオットの他の作品にも見られるものであるが、その原型がここにあると言える。

3

さて、ここでこの作品における身体に関わる具体的な描写を取り上げて検討してみたい。前掲の引用の、デンプスターの帰宅時にジャネットが酒を飲んでいたのを見破られた後の、デンプスターが妻に暴力を振るう場面である。

He laid his hand with a firm grip on her shoulder, turned her round, and pushed her slowly before him along the passage and through the dining-room door, which stood open on their left hand.

There was a portrait of Janet's mother, a grey-haired, dark-eyed old woman, in a neatly fluted cap, hanging over the mantelpiece. Surely the aged eyes take on a look of anguish as they see Janet — not trembling, no! it would be better if she trembled — standing stupidly unmoved in her great beauty while the heavy arm is lifted to strike her. The blow falls — another — and another. Surely the mother hears that cry — 'O Robert! pity! pity!' (284-285)

この場面ですば注目すべきは、食堂にかけられているジャネットの母親の肖像画の役割である。ここでの暴力の情景は、肖像画の母親の目を通して形で、いわば間接的に語られる。まず視覚面で 'Surely the aged eyes take on a look of anguish' と客観的に第三者の目から描写した後で、次に聴覚的に 'Surely the mother hears that cry' となって、単に母親の表情を他人が描写するのではなく、母親がそのまま主体となり、耳を澄ませている。ここでは、具体的・直接的に暴力を描写するよりも、デンプスターの腕が振り上げられたところまでを描いた後、一段階退いた形で母親の目や耳を通して描写することで、(母と娘の関係を示しながらも) その暴力の悲惨さをより強烈に描くことに成功している。

このシーンでの視覚的焦点の空間的移動をたどってみよう。デンプスターがパブを出て夜道を歩いて自宅に戻り、ノックしても妻が現れないので自分で鍵を開けて入る。そこへジャネットが廊下に明かりを持って迎えに出る。怒ったデンプスターは妻を無理やり食堂へ追いやり、そこで彼女を殴ろうとする。ここまでのいわば水平的空間移動から、次に視点は暖炉の上の母親の肖像画に垂直に移動し、そこから室内の人物を見下ろす形でデンプスターのジャネットへの暴力が視覚的、聴覚的に示される。そして、語り手はさらにその母親に焦点を移動する。

Poor grey-haired woman! Was it for this you suffered a mother's pangs in your lone widowhood five-and-thirty years ago? Was it for this you kept the little worn morocco

shoes Janet had first run in, and kissed them day by day when she was away from you, a tall girl at school? (285)

ここでは、現在の食堂の場面は一時停止したまま、時間的に35年をさかのぼっている。その後、叙述は物語の現在に戻り、空間的にはデンプスターの家の食堂から、ジャネットの母の家の寝室に移動して行く。‘The mother lies sleepless and praying in her lonely house, weeping the difficult tears of age, because she dreads this may be a cruel night for her child.’ (285) スピルカはこの場面について次のように述べている。

エリオットはこうした家庭の内情を暴露するさいに勇敢にも、直接的な描写と、語り手自身のセンチメンタルでメロドラマチックでさえあるような言葉とが交じり合った文体を用いている。しかも、センチメンタリティーとメロドラマ性は奇妙にもその役割を果たして十分機能しているのである。なぜなら、フィクションにおいて我々は隣人の家のドアを開けその心と頭脳を覗き込み、そこに想像もつかず予想もしえなかった恐ろしい事が行われているのを見るのであるから。¹⁵⁾

確かにこの描写にセンチメンタルな面があることは否定できない。しかしここでは夫婦間の暴力という激しい肉体的接触の場面が、視点の移動や空間的・時間的焦点の変化などを含んだ複雑な重層的叙述で描き出されているという点の方により注目したい。激しい動きのある中心的場面で、その動きのみを至近距離や神の視点から描くのではなく、視点を空間的・時間的に移動し、あるいは他の人物に視点を仮託し、かえてその場面から距離を置くことによって、中心的な事件の持つ意味を重層的かつ立体的に描出している。これは作家として出発したばかりであるジョージ・エリオットの並々ならぬ力量を示すものである。

ところで、なぜデンプスターはこの場面で妻の飲酒を見抜けたのだろうか。デンプスター自身が飲んでいたのであるから、においではなく、顔色だろうか。語り手はただ、彼女が ‘a strangely fixed, sightless gaze’ (284) をしていた、と言うだ

けである。しかし、この描写から、ジャネットの上気した頬の色が読者には見えてくる。さらに敏感な読者は、泥酔して帰宅したデンプスターの発散するブランディーとかぎ煙草の混じったにおいだけでなく、ジャネットの息づかいから、ほのかなアルコールの香りも感じ取るだろうか。この場面での二人の肉体的接触は、さわめて簡潔かつ確かな描写で語られている。その簡潔さゆえに、読者は逆に、デンプスターの頑強な手がジャネットの肩をがっしりとつかむ肉と肉の接触を感じ、デンプスターのこぶしとジャネットの体がぶつかる響きを聞き、ジャネットの痛みを感じ、具体的にどこを殴るのだろうか、と嫌悪感をいだきながら想像しつつ、彼女の体に浮かんでくるあざを目に浮かべることが出来る。‘The blow falls.’ (285) という非人称の描写には、人間関係を肉体のぶつかり合いという関係性に還元してしまう、暴力という行為の非人間性がある。そこには存在しているのに語られない肉体の音や情景があり、それはいやおうなしに読者の想像力の領域に侵入し、身体感覚を刺激する。

また、この家庭内暴力の場面は夫婦の肉体的接触の情景でもある。子供のいない、心の離れてしまった夫婦の、たった一つの体のつながり、肉体的接触が、このような暴力なのである。‘I’ll beat you into your senses.’ (285) とデンプスターは叫ぶ。彼は殴ることで妻をアルコール依存から回復させられるかのようなことを口にするが、それは妻を殴る口実に過ぎない。実は家庭内暴力は、スピルカが述べているように「愛情の問題というよりは、男性が、結婚生活において脅かされあるいは失われた支配権を取り戻そうとする必要性から生じる問題なのである」¹⁶⁾ さらにまた、デンプスターには、トライアン攻撃の場合と全く同様に、抵抗しない弱者に苦痛を与えること自体が快楽となっている。彼のこの叫びには、妻のアルコール依存を発見した夫の嘆きというより、何かしら快感の予感のような響きさえある。そうした意味では、この夫婦の性的関係は、暴力を媒介としたサディスティックなものへと変質しているとも言えるだろう。しかし、それはジャネットにとってはあくまで一方通行の暴力であり、双方の合意に基づく性的関係ではない。こうして家庭内暴力とアルコール依存という、肉体と精神の矛盾の噴出をきっかけにして、男女間の精神的かつ性的な関係が、より原初的根源的な、暴力と恐怖による強者と弱者の関係に変質している。

『ダニエル・デロンダ』のグェンドリンとグランドコート Grandcourt の場合

もこれに近い関係である。グェンドリンは、結婚前には美しく誇り高い娘としてグランドコートに征服心を掻き立て、彼よりも優位な立場に立っているという幻想を抱いていた。しかし彼女が経済的困窮を逃れるために彼と結婚した後では、夫は圧倒的な力で妻を自分の所有物として扱う。それは性的関係でありながらも、同時に支配と被支配の力関係である。そしてこの関係は最終的に、暴力の最終形態ともいえる（消極的）殺人に至る。

こうして、エリオットはこの中編第三作において、その作家としての未経験と可能性の両者を示している。たとえばデンプスターの飲酒や暴力の原因を示していないという点においては、未だ十分な人物造形に至っていない。しかし、家庭内暴力の場面の複雑な仕掛けを施した語りは、彼女が、言語を用いて人間の状況を多角的に描く高い技術をすでに持っていたことを示すものである。この作家は、夫婦の関係が支配・被支配の直接的肉体的な関係に変質し、その歪みが暴力として噴出する様相を正面から描くことで、アルコール依存と家庭内暴力という形を取って現れた肉体と精神の矛盾を暴露し、さらには、近代的自我を持つ人間の身体と精神の均衡の危うさという現代的な問題をも提示している。こうした点は、ジョージ・エリオットの想像力の特徴を明確に示しているものと言えよう。

注

本稿は日本ジョージ・エリオット協会第7回全国大会（2003年11月29日、日本大学文理学部）でのシンポジウム「*Scenes of Clerical Life* を楽しむ」における口頭発表を原形としたものである。

- 1) 片岡信「ジョージ・エリオットの有機体神話における「病気」の役割——「ジャネットの悔悟」を中心に」高橋康也編『逸脱の系譜』研究社 1999年 p. 409。
- 2) 『牧師館物語』三部作における女性像に関しては以下の拙論を参照された。『George Eliot の *Scenes of Clerical Life* における女性像の変貌』『英米文学』

（立教大学）第47号（1987年）pp. 19-39。

- 3) 「家庭内暴力」という言葉は、家庭外での恋人の間の暴力などを含んでいないなどの理由で、近年では「ドメスティック・バイオレンス」略して「DV」などと言い換えられつつある。しかし、本論では、以下の理由により「家庭内暴力」を用いている。第一に、本論で扱うのは特定の夫婦間の暴力のみである。第二に、国立国語研究所が「ドメスティック・バイオレンス」を「配偶者間暴力」と言い換えようとしたが「配偶者だけでなく、元配偶者や恋人らの暴力も含まれる」との理由で再検討することにした、という報道（『読売新聞』2004年10月9日等）からも明らかなように、現在のところ、'domestic violence'という英語の概念に対する適切な日本語の表現が確定していない。第三に「ドメスティック・バイオレンス」というカタカナが日本語として十分定着しているとは思えない。
- 4) 中島正太「「介護」するジャネット——「ジャネットの悔悟」と19世紀イギリスの介護問題」『比較文化研究所年報』（徳島文理大学）第16号（2000年）p. 1。
- 5) Mark Spilka, 'Domestic Violence in *Janet's Repentance*: George Eliot's Brave Subtext', in *Eight Lessons in Love: A Domestic Violence Reader*, University of Missouri Press, 1977, p. 1.
- 6) 本論ではアルコール「中毒」ではなく「依存」という用語を用いた。薬物や飲食物の過剰あるいは不適切な摂取による障害という意味合いのある「中毒」という言葉よりも、「依存」の方が、精神的・身体的にアルコールに依存し、脅迫的に摂取を続けていく状態をより明確に示すと思われるからである。
- 7) David Lodge, ed., *Scenes of Clerical Life*, Harmondsworth: Penguin, 1973, p. 252. 以下、本書からの引用はカッコ内にページ数のみを示す。
- 8) J. W. Bennett, 'The Apprenticeship of George Eliot: Characterization as Case Study in "*Janet's Repentance*"', *Literature and Medicine*, 9 (1990), p. 61.
- 9) モデルについては、たとえば以下の論文に詳しい情報がある。Gordon S. Haight, ed. by Hugh Witemeyer, 'George Eliot's Originals', in *George Eliot's Originals and Contemporaries: Essays in Victorian Literary History and Biography*,

London: Macmillan, 1992, pp. 3-21.

- 10) Sheila Shaw, 'The Female Alcoholic in Victorian Fiction: George Eliot's Unpoetic Heroine', in Rhoda B. Nathan, ed., *Nineteenth-Century Women Writers of the English-Speaking World*, New York: Greenwood, 1986, p. 176.
- 11) Kathleen McCormack, *George Eliot and Intoxication: Dangerous Drugs for the Condition of England*, Houndmills, England: Macmillan, 2000, p. 205.
- 12) Derek Oldfield and Sybil Oldfield, 'Scenes of Clerical Life': The Diagram and the Picture, in Barbara Hardy, ed., *Critical Essays on George Eliot*, London: Routledge and Kegan Paul, 1970, p. 11.
- 13) 洲脇寛 「物質（薬物・アルコール）依存と嗜癖行動障害：類似性と多様性をめぐって」『こころの科学』 No. 111（2003年9月） p. 65。また、信田さよ子『依存症』文芸春秋 2000年 p. 40も「嗜癖としての暴力」という表現を用いている。
- 14) ニール・ケッセル、ヘンリー・ウォールトン（上杉明訳）『アルコール中毒とは』春萌社 2002年 p. 15。
- 15) Spilka, p. 24.
- 16) Spilka, p. 1.

'I'll beat you into your senses'

– Alcoholism and Domestic Violence in 'Janet's Repentance'

Keiji Yata

George Eliot's third work of fiction, 'Janet's Repentance' not only offers an early example of George Eliot's creative imagination, it is, as this paper will show, a key text in her study of society and the frailty of human nature as negotiated through the body.

Although there are early glimpses of the author's later motifs (such as marital relationships, Christianity, humanity, the individual and community) in this work, the story also offers an exploration of two vital social issues that are never dealt with in her later novels: alcoholism and domestic violence. McCormack's speculation that Eliot's own mother may have been an alcoholic, thus enabling her daughter to give an accurate description of the symptom, may have some validity, although this text offers substantially more than the autobiographical recollections of an, as yet, inexperienced writer's past experiences.

Whilst acknowledging evidence of Eliot's inexperience at this early stage of her career, such as the lack of persuasive reasons for Dempster to become an alcoholic and abusive husband, or the absence of psychic or moral development prior to his death, this paper, through a close and detailed reading, shows how 'Janet's Repentance' offers a three-dimensional and multi-layered description of the tragic transformation of the marriage, from a relationship of support and understanding into one of physical dominance and emotional subjection. Thus, rather than being a minor, curiosity piece, 'Janet's Repentance' is a brave, uncompromising portrayal of a middle-class alcoholic woman in the Victorian era, which reveals the growth and development of the author's creative imagination and narrative skill.